戦後の植民地と脱植民地化の政治

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

独立した直轄植民地

第B部第I章で直轄植民地としての成立を述べた海峡植民地は、第二次世界大戦を越えて存続することはありませんでした。日本の占領と英国軍政の時代（本部第I章で検討）を経て民政が復活すると、ロンドンはこの地域の領土を再編しました。1946年4月1日、海峡植民地は解体されました。シンガポールは独立した直轄植民地となり、総督を長とする民政機構の下でマラヤ半島から切り離されました。[1]

この分離は、ロンドンがマレー諸州を再編していた半島における英国の優先事項と、海軍基地および自由港としてのシンガポールの特別な地位を反映していました。シンガポールの商人にとって、直接の帰結は、港と、錫とゴムを供給する後背地との間に行政上の境界が生じたことでした。もっとも、貿易、通貨、銀行業は引き続き一体のままでした。以下の各節で示すとおり、この植民地とマラヤの諸領域は、共通のカレンシー・ボードが発行する通貨を引き続き共有していました。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

戦後の経済の回復は一様ではありませんでした。1947年のストライキは公共交通機関その他のサービスに大規模な停止をもたらしましたが、同年の終わりには錫とゴムの需要に支えられて経済は回復し始めました。[2] 第B部第IV章では、港の繁栄がこの二つの商品にいかに密接に依存していたかを示しました。この依存は戦後も続きました。その後20年間のシンガポールに関するあらゆる政治構想が、マラヤの後背地へのアクセスという問題に答えなければならなかったのは、このためです。

最初の選挙と非常事態

政治の変化は緩やかに始まりました。1946年立法評議会選挙条例（Legislative Council Election Ordinance）は、植民地の歴史上初めての選挙を定め、有権者は立法評議会の非官職議員13名のうち6名を選出することとされました。最初の選挙は1948年3月20日に実施され、投票権は成人の英国臣民に限られていました。登録が任意であったため、有権者登録をしたのは約2万2,300人にとどまり、投票日に投票したのは1万4,126人でした。[3] 選挙管理局（Elections Department）は、潜在的な有権者数を約20万人、登録者数を2万2,395人としています。[4]

この選挙は、反乱の影の下で行われました。約3か月後の1948年6月、半島で共産主義勢力が主導する武装反乱であるマラヤ非常事態（Malayan Emergency）が始まりました。植民地政府は緊急の拘禁権限を導入し、これはその後数十年にわたりシンガポールの治安法制を形づくることになりました。[5] 非常事態はまた、自治を急進左派から遠ざけておかなければならないという英国の見方を強固にしました。この懸念は、その後の脱植民地化のあらゆる段階に通底しています。

1951年の第2回選挙では、選挙で選ばれる議席が9に増やされました。同じ年、国王ジョージ6世はシンガポールに市（city）の地位を付与しました。[6] 英語教育を受けた専門職層と商人を支持基盤とする進歩党（Progressive

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Party）が、これら初期の選挙を制しました。その支持基盤の狭さは、有権者がまだ少なく、その大部分が英語話者であったことを反映していました。

レンデル憲法と1955年の選挙

1953年、政府はサー・ジョージ・レンデル（Sir George Rendel）を長とする委員会を任命し、憲法改革を検討させました。その提案により、32議席（うち25議席が選挙による）からなる立法議会が設けられ、有権者の自動登録制度が導入されました。[7] 自動登録は政治のあり方を一変させました。1955年には有権者数が6倍以上に増えて約30万人となり、約15万8,000人が投票しました。投票率は52.66％でした。[8] 選挙管理局によれば、この改革により有権者数は約7万6,000人から30万299人へと増加しました。[9]

1955年4月2日の選挙は、最初の政治的衝撃をもたらしました。進歩党はわずか4議席しか獲得できませんでした。デービッド・マーシャル（David Marshall）率いる労働戦線（Labour Front）は10議席を獲得し、3議席を得たUMNO–MCA連盟と連立政権を組みました。新たに結成された人民行動党（People's Action Party）も3議席を獲得しました。マーシャルは1955年4月7日に首席大臣に就任しました。[10]

新政府は発足直後から、労働運動の過激化に直面しました。1955年5月12日、福利（Hock Lee）バス会社のストライキは暴動に発展し、警察官1名とアメリカ人特派員1名を含む4人が死亡し、31人が負傷しました。[11] 投資家にとって、この暴動は、信頼できる労働力と輸送に貿易を依存する港湾都市において、選挙で選ばれた政府が秩序を維持できるのかという疑問を投げかけました。英国側にとっては、国内治安をまだ移譲できないことを裏付けるものでした。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

ムルデカ会議と1958年シンガポール州法

1956年、マーシャルは独立を求めて超党派の代表団を率いてロンドンに赴きました。会議は1956年4月23日に始まりましたが、植民地大臣が1957年4月の独立という日程を拒否し、英国が国内治安の管理権の移譲を拒んだため、5月15日に決裂しました。マーシャルは使命が失敗した場合には辞任すると公約しており、1956年6月7日に辞任しました。[12]

後任のリム・ユーホック（Lim Yew Hock）は、左派に対してより強硬な姿勢をとりました。1956年の華語中学校暴動の後、同政権は約900人を逮捕し、これによってロンドンは現地政府の秩序維持能力について安心を得ました。新たな会議が1957年3月11日に始まり、4月11日にシンガポール州の設立について合意して終了しました。1957年シンガポール市民権条例（Singapore Citizenship Ordinance 1957）は1957年11月1日に施行され、初めて現地の市民権を創設しました。[13]

英国議会は、シンガポール州法（State of Singapore Act）によってこの合意に法的効力を与えました。同法は1958年7月24日に可決され、1958年8月1日に国王の裁可を受けました。ヤン・ディ・プルトゥアン・ネガラ（Yang di-Pertuan Negara）が総督に代わって女王の代理を務め、女王は名目上の国家元首にとどまることとされました。防衛と外交はロンドンが引き続き担いました。国内治安は、英国側3名、首相を含むシンガポール側3名、マラヤ連邦側1名からなる国内治安評議会（Internal Security Council）に委ねられました。マラヤの議席はクアラルンプールにシンガポールの治安についての発言権を与えるもので、島の政治的将来が半島のそれと結びついていることを早くから示す兆候でした。[14]

注

1. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1946年4月1日に海峡植民地は解体され、“Singapore became a Crown Colony

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

with a civil administration headed by a Governor and separated from peninsular Malaya”。 ↩

2. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1947年のストライキは公共交通機関その他のサービスに大規模な停止をもたらした。経済は錫とゴムの需要に支えられ、1947年末に回復し始めた。 ↩

3. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1948年3月の選挙、“The right to vote was restricted to adult British subjects”。Wikipedia, “1948 Singaporean general election”（2026年11月最終閲覧）：投票日は1948年3月20日。選挙による議席は6。登録有権者2万2,334人。投票数1万4,126票。 ↩

4. Elections Department Singapore, “70 Years of Elections: Milestones”（eld.gov.sg）：1946年立法評議会選挙条例により、非官職議員13名のうち6名が選挙で選ばれた。潜在的有権者約20万人、登録者2万2,395人、投票者1万4,126人。 ↩

5. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：マラヤ非常事態は1948年3月の選挙の約3か月後に始まった、“an armed insurgency by communist groups in Malaya”であった。この時期に国内治安立法が導入された。 ↩

6. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1951年の立法評議会選挙では選挙による議席は9で、そのうちシンガポール進歩党が6議席を獲得した。市の地位は1951年9月22日に国王ジョージ6世によって付与された。 ↩

7. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1953年、政府はサー・ジョージ・レンデルを長とする委員会を“to study the possibility of self-government for Singapore”任命した。Wikipedia, “1959 Singaporean general election”（2026年11月最終閲覧）：1955年のレンデル憲法は立法議会の議席を32とし、うち25が選挙、7が任命によるものとした。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

8. Wikipedia, “1955 Singaporean general election”（2026年11月最終閲覧）：“more than 300,000 registered voters”（結果表では30万199人）。有権者は“had expanded more than sixfold compared to previous elections”。投票数15万8,075票、うち有効票15万6,324票。投票率52.66%。 ↩
9. Elections Department Singapore, “70 Years of Elections: Milestones”（eld.gov.sg）：レンデル委員会が勧告した自動登録は「immediately raised the number of voters from about 76,000 to 300,299 in 1955」。この数字は、Wikipediaの結果表にある30万199人とわずかに異なる。 ↩
10. Wikipedia, “Crown Colony of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：1955年4月2日の選挙。進歩党4議席、労働戦線10議席、UMNO–MCA–MU連盟3議席、人民行動党3議席。Wikipedia, “David Marshall (Singaporean politician)”（2026年11月最終閲覧）：1955年4月7日から首席大臣。 ↩
11. Wikipedia, “Hock Lee bus riots”（2026年11月最終閲覧）：1955年5月12日の暴動。死者4人、うちアンドリュー・テオ（Andrew Teo）巡査とアメリカ人特派員ジーン・D・シモンズ（Gene D. Symonds）を含む。負傷者31人。 ↩
12. Wikipedia, “David Marshall (Singaporean politician)”（2026年11月最終閲覧）：会議は1956年4月23日に始まった。レノックス＝ボイド（Lennox-Boyd）は4月25日、提案された1957年4月の独立日程を拒否した。会議は1956年5月15日に決裂した。Wikipedia, “Merdeka Talks”（2026年11月最終閲覧）：英国が国内治安の移譲を拒否したため会議は決裂した。Wikipedia, “David Marshall (Singaporean politician)”（2026年11月最終閲覧）：1956年6月7日に首席大臣を辞任。 ↩
13. Wikipedia, “Merdeka Talks”（2026年11月最終閲覧）：リム・ユーホックは1956年にマーシャルの後を継いで首席大臣となった。華語中学校暴動により約900人が逮捕された。Wikipedia, “Self-governance of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：会議は1957年3月11日に始まり、4

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

月11日に終了した。1957年シンガポール市民権条例は“commenced on 1 November 1957”。 ↩

14. Wikipedia, “Self-governance of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：State of Singapore Actは1958年“given royal assent after having been passed by the Parliament on 24 July”、裁可は1958年8月1日。Wikipedia, “Self-governance of Singapore”（2026年11月最終閲覧）：ヤン・ディ・プルトゥアン・ネガラは“to represent Queen Elizabeth II, who remained titular head of state”とされた。国内治安評議会は英国側3名、“three from Singapore (including the Prime Minister) and one from the Federation of Malaya”で構成された。 ↩

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com